観成園だより

発行：特別養護老人ホーム　観成園
長野県駒ヶ根市赤穂 3214-1
tel(0265)83-1611　fax(0265)83-1616
ホームページ：http://inanfukushi.or.jp

今年は亥（いのしし）年です。平成３１年（平成最後の年）でもあります。今度はどんな年号になるのでしょう？ともあれ今年も元気に過ごせたらよいですね。

初釜の会

ひょっとこ踊りや
まゆ玉作りもありました。

今年もよろしく
お願いします

１２月１月はたくさんの行事がありました。上記は１月の行事、次頁は１２月の行事です。時季に合わせたクリスマスコンサートや餅つきなどが行われました。楽しんでいただけましたか？

クリスマスコンサート

サンタさんからプレゼントはありましたか？？

鶴の会

宮田歌謡曲友の会

まつざきさんは平成１８年から１２年、小木曽さんは７～８年お世話になってます。もう顔なじみ？！あらためて御紹介します。

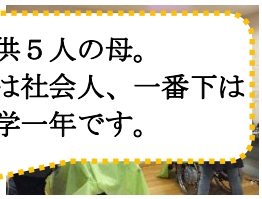
一人で映画鑑賞が趣味。午前午後と続けてみることもあります。

旅行好き。お酒も好き。あとはネットサーフィンかな。

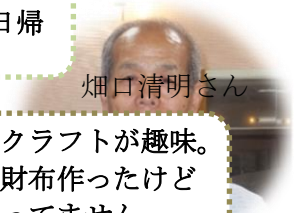
松崎春子さん

小木曽正和さん

ゴルフとドライブが趣味。仙台や広島なら日帰りします。



子供５人の母。
上は社会人、一番下は中学一年です。



畑口清明さん

レザークラフトが趣味。最近、財布作ったけどまだ使ってません。

小池和江さん

畑口翼さん

美容・理容

基本的に奇数月の月末に美容師さん偶数月の月末に理容師さんが来てくれます。美容師さんの方は移動福祉美容として、個人宅にも出かけるそう。また月末でなくても好きな時に呼んでもよいそうなので御希望の方は職員に声をかけてください。染めやカット、パーマもＯＫです。理容師さんの方はお店を持っていて、お店を休んできてくれています。上記で御紹介できなかった美容師さん１名理容師さん１名がいらっしゃいます。その方についてはまた出会ったら、お名前聞いてみてください。

送迎から備品の修理までやってます！！

北澤勝二業務員　　下平利子業務員

洗濯物はもちろん裁縫もやってます！！

業務員紹介

洗濯物を届けたり、送迎・修理の為毎日園の中を走り回っています！！
洗濯場では職員はもちろん、入居者の方も話しをするために立ち寄っています。
もしかしたらお菓子が出てくるかも！？ぜひお待ちしてます！！

今月の小話：

「君の知らない世界」

　目を開けるとそこは見た事のない世界だった。不思議な事に安心と不安を同時に感じた。
「・・・どこだろうか。ここは」
　軽い足取りで僕はその知らない世界を歩き出した。
「お兄さん」
　少し歩いていると声を掛けられた。振り返るとそこには少女が一人立っていた。少女は続けて尋ねてくる。
「何処に行くの？」
「わからない。だけど歩かないといけない気がするんだ」
「・・・そうなの」
　そう答えると少女は僕についてきた。ただ楽しそうに僕の後ろを歩く。僕は不思議に思い、少女にたくさんのことを尋ねる。しかし彼女は静かに微笑むと「わからない」と嘘か真かわからない返事をした。

　歩き続けると川についた。その川は凍っていた。途端に凍えるような寒気を感じるようになり僕は思わず眉間にしわを寄せた。
　突然少女が僕の腕を引いた。
「ここを渡りましょう」
「何を言っているんだい。こんな格好では凍えてしまうよ」
「あらあら寒いの？“あなた”はやっぱり寒がりね」
　少女は優しく笑うと僕の手を離した。そして川沿いを歩いていく。彼女の言葉に僕は少しの違和感を抱く。
「ねえ、やっぱりって何だい？君は僕のことを知っているのかい？」
「そうね。でも今の私はあなたを知らないわ」
「だけど！」
　何かを知っているからこそああ言ったのではないのか。そう問おうとすると彼女は微笑んだ。
「その先はまだ・・・言わないで」

　言葉を交わさずに歩く。今度は彼女が前を歩いていた。先ほどまでとは違い、彼女は楽しそうに鼻歌を奏でている。それは妻が生前に好んでいたそれとよく似ていた。
「いい曲だね」
「ええ、大好きなの」
「奇遇だね。僕の妻も好きだったんだ」
　その言葉に彼女は再び黙ってしまった。そのまま足を止めるとまた川を指差す。
　先ほどまであった氷が少し溶けているように見える。
「そろそろ時間だわ」
「・・・え？」
「私も帰らないと神様に怒られてしまう」
「え・・・、と」
「ねえ、あなた」
「な、なんだい？」
　少女は一拍置いてから笑う。
「ずっと待っているから」

—どうか長生きしてくださいね。

「おじいちゃん！」
　目を覚ますと顔一面に広がる孫の顔。孫は今にも泣きそうな顔でこちらを見ている。しかしわしが目を開けたことに大層驚いたようで、そしてそのまま息子たちを呼びに行ったようだ。
　後に話を聞くとどうやら事故に遭ってしまったらしい。たった数日のことであるが意識はなく、死すらも覚悟していたと聞かされた。
「そうか」
　誰もいなくなった病室で、一人窓を見る。今日はひどく晴れており事故当時にあった雪たちもすべて溶けてしまったらしい。そういえばあの川もまた溶けかけていた。
「あれはお前だったのか」
　先に逝ってしまった妻。そういえば少女の姿は彼女の幼少時代に良く似ている。
　そんなことを思い笑みがこぼれる。
「すまんな。どうやらわしはまたお前に助けてもらったようじゃ･･･もう少し待っていてくれな、ばあさん」

—構いませんよ。あなたの遅刻癖にはなれています。どうかゆっくりおいでになってくださいね、おじいさん。